ESL 政策を堅持する香港の英語教育から日本の英語教育への示唆[1]
― その１ ―

村上美保子（星城大学）/ 髙島英幸（東京外国語大学）
今井典子（高知大学）/ 東野裕子（西宮市立高木小学校）
奥村耕一（横浜市立旭中学校）/ 石毛佐和子（旭市立三川小学校）
牛山真弓（茅野市立東部中学校）/ 斯波隆晃（東庄町立石出小学校）
人見徹（東京外国語大学大学院）

香港（正式名称：中華人民共和国香港特別行政区）は，大小 260 以上の島々からなり，総面積 1,103km^2 に約 700 万人が住む。1997 年のイギリスからの返還以降は中国によって自治が認められている特別行政区（Special Administrative Region, SAR）である。そのため，中国本土とは異なる法律や制度が適用されている。現在，人口の約 95%が漢民族で[2]，多くの人々は普段広東語を使用している。

香港では，広東語，普通話[3]に加え，1997 年以降も英語は公用語であり，外国語ではなく第２言語（English as a Second Language, ESL）としての認識で英語教育を重視する姿勢を堅持している[4]。中国本土の経済的発展の影響で，近年，普通話の重要性が高まってきており，教育局は，「両文三語」（読み書きの言葉として広東語・英語の２言語，話し言葉として広東語・普通話・英語の３言語を使用できる能力）の育成を推進している。

本稿では，香港の教育制度と訪問した初等学校３校の３つの授業を概観し，日本の外国語活動への示唆を詳説する。

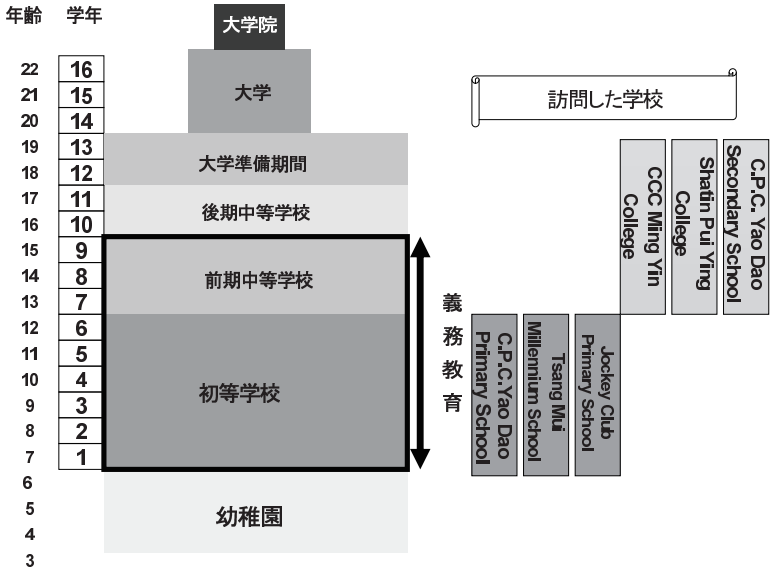
１．教育制度の概要

1.1 教育制度

2011 年現在もイギリス統治時代の，初等学校６年間，前期中等学校３年および

後期中等教育２年間，大学準備期間２年間，大学３年間というシステムを採用している（図１参照）。義務教育は，７歳から始まる初等教育６年間と前期中等教育３年間の計９年間で無償である[5]。2012 年には，中国本土と同じ 6-3-3-4 制へと移行し，義務教育期間も 12 年間に延長される。香港の学校暦は９月に始まり，翌年７月に終わる２学期制（上学期９月から１月・下学期２月から７月）である。

図１　香港の学校制度（2011 年まで）と訪問学校



義務教育期間の初等学校第３，６学年と前期中等学校第９学年に，児童・生徒は統一学力テスト（Territory-wide System Assessment, TSA）を受ける。このテストは，学習達成度を把握することを目的として行われるが，TSA を過剰に意識する学校が現れるなど新たな問題も指摘されている (Yu, Kennedy, Fok, & Chan, 2003)。

後期中等教育段階における試験は，現在，第 11 学年と第 13 学年で行われている。第 11 学年の生徒は HKCEE (Hong Kong Certificate of Education Examination) と呼ばれ

る試験を受け，この結果で2年間の大学準備学校へ進学できるかどうかを決定する。第13学年の生徒が学年の最後に受験する試験はHKALE (Hong Kong Advanced Level Examination) と呼ばれ，この結果で大学進学の是非および進学する大学を決定する。

1.2　外国語（英語）教育

英語教育の方向性として，教育省は4つのポイントを挙げている[6]：

① 教室内・外で，目的のあるコミュニケーションのために英語を使用する機会を多く与える

② 自律性を促す学習者中心の指導を行う

③ 批判的思考と自由な表現・創造性を養うために様々なテキストを用いる

④ 効果的かつ自律的な生涯学習に資する言語学習方略，価値観，態度を養う

英語の授業は，初等学校から前期・後期中等学校まですべて英語で行われており，各学校に最低一人は英語ネイティブスピーカー教師（Native English-speaking Teachers，以下NET）を配置するというNET Schemeが実施されている。現在，英語の授業は初等学校第1学年から正式に始まるが，多くの幼稚園が英語授業を導入している。幼稚園はすべて私立であり，NETによる英語指導の質と量が，幼稚園を選ぶ保護者に対する有利な材料になるという。英語は，初等学校から後期中等教育にかけて，必修科目として教えられ，さらに，後期中等教育（第10～13学年）では，Literature in Englishという選択科目が設けられている。

また，日本の『学習指導要領』に相当する，現行の*English Language Curriculum Guide, Primary 1-6* (2004) および*English Language Curriculum and Assessment Guide, Secondary 4-6* (2007) では，タスクに基づく指導を推奨している。初等学校では，児童をタスクに取り組ませ課題解決をペアやグループでさせることで，目的のある英語によるコミュニケーションを授業で体験させ，得た情報を処理させ，達成感を持たせる事が必要であるとしている。また，初等教育に特徴的な方法として，教科横断的に，また，個々のタスクを複数組み合わせてプロジェクトとする方法[7]を提案し，①言語を使うことと言語を学ぶことを統合的に行うことができる，②プロジ

ェクトの達成を通して責任感を養うことができる，③学校で学んだことを社会で活用するなど生涯学習の基礎となるなどの利点を挙げている。中等学校でも同様に，タスクとプロジェクトを推進し，生徒は知識を得てスキルを伸長する学習から，仲間と協働して課題解決を行う学習へと移行することが期待されている。

2. 初等教育

初等教育段階では，少人数教育（１学級の上限は 25 人），IT の活用，言語教育の充実，学習環境の向上，中国本土からの児童・生徒へのサポート[8]が強調されている。外国語の授業を除き，授業における主たる使用言語は広東語である。初等学校からは学区内の中等学校へ進学するのが基本であるが，成績や課外活動および面接をもとに他学区の学校への進学も可能である。

初等教育学校では，授業は年間を通して曜日に関係なく６日サイクルで時間割が組まれ，６日間で 48 単位時間の授業をすることになる。１単位時間は 40 分，１日８単位時間授業が行われる。教科は，中国語（中文，普通話），算数，図工（視芸），英語（英文），音楽，体育，公民（常識），情報（電脳），総合であり，英語は６日間で８～10 単位時間の授業がある。

2.1 C.P.C. Yao Dao Primary School

高層住宅街の中に位置する，児童数 550 人の初等学校である。教師数は 32 人，そのうち，中国人英語教師が９人，NET が２人である。２人の NET のうち，一人は政府の予算で，もう一人は学校独自の予算で雇用している。中国人英語教師は２学級の指導を担当し，６日間で各学級 10 時間の英語の授業を持つ。10 時間の英語の時間のうち，３時間は NET と中国人教師とのティーム・ティーチングで，残り７時間は中国人教師単独で授業をしている。

2.1.1 第２学年の授業

児童数 20 人で，中国人英語教師と NET のティーム・ティーチングであった。教

師はすべて英語で指導および支援をしていた。教室には，コンピュータが設置され，プロジェクターで教科書の内容がホワイトボードに映し出されるようになっている。教室の壁には，現在学習している単語などが掲示されていた。

授業のはじめに歌を歌い，曜日と天気の表現方法の復習をした。教師の「昨日は何をしましたか。」という質問に対し，児童は「私は，泳ぎました。」「図書館に行きました。」などと答えていた。次に，カードを提示し，単語の発音の練習とキーワードに関係した質問をした。例えば，教師が to のカードを見せ，to を用いた文を作るように指示し，児童は，I go to school.　I go to bed. などと口頭で答えた。この後，*Oh, No! Not Homework* という本を NET が読み聞かせた。また，児童の読めそうな部分や，練習した語が入っている文を一斉に声に出させて読ませていた。次に，児童は４人一組のグループをつくり，My day というすごろくをした。これは，サイコロを振って出た数だけ駒を進め，その場所には何時に何をするかという質問（例えば，What time do you go to bed?）が書いてあり，それについて児童が自分の生活を振り返って答えるものであった。担任や NET はそれぞれのグループを回って，質問や答え方の支援をしていた。最後に，プリントにある，What time does Tony go to bed? などの質問に At 10 o'clock. などと答えさせて記入させ，答え合わせをした。児童にとって書くことは難しいようで，できている児童もいたが，なかなか書けない児童もいた。

2.2　Tsang Mui Millennium School

1995 年に創立された香港では比較的新しい初等学校である。児童数は約 1,000 人，教師数は 60 人で，そのうち中国人英語教師 17 人，NET １人である。学級数は，第１学年から第６学年までそれぞれ５学級である。

学校全体の取り組みとして，すべての教科においてグループによる協働学習を取り入れている。これは，学級を４人ずつのグループに分け，それぞれのグループで協力し，助け合いながら，学習を進めていくものである。グループは，習熟度別に理解力がある児童１人，理解力が不十分な児童１人，平均的な児童２人で構成され

ている。また，互いの頑張りや良さを認め合う活動として，手拍子と賞賛の言葉のかけ合いを全学級で行っている。

教師は校内研修会を定期的に開き，授業の進め方について話し合ったり，相互に授業参観を行ったりして，指導力の向上に役立てている。研修会の運営は，授業を担当していない，カリキュラムや教材開発を専門に担当する教師が行っている。

2.2.1 第２学年の授業

児童数34人，８グループ（４人グループが６つ，５人グループが２つ），中国人英語教師１人による授業であった。

英語で挨拶をした後，前時までの復習として，誕生日パーティーの食事に関する会話をグループで練習し発表した。What kind of food do you want for your birthday party? と一人が質問した後，グループの他の児童が，I want chips because it's yummy. などとそれぞれに答えた。答えることが難しい児童には，同じグループの児童が小さな声で一緒に言うなどの支援が自然に行われていた。

次に食べ物の味について新しい単語 sweet, salty などを学んだ。発音の練習に続いて，Do you like sausages? などと教師は質問し，Yes, I do. Because I like salty things. のように salty という語を使って答えさせる練習をした。

さらに，主語を Marco などの三人称に変え，like に–s をつけて文を作る練習では，指で S の文字を表しながら言う動作を取り入れ，低学年の児童に適した指導が行わ

れていた。応答練習は，個人やグループで答えて行われるが，いずれの場合も正しく応答した後には，学級全員で手拍子の後，“You are awesome / No.1 / excellent / great!” “Thank you for your encouragement!” というやり取りが行われ（写真参照），テンポよく授業が進められていた。

その後，教科書やノートを使って，学習したことばに丸印を付けて発音したり，教師が黒板に書いた文をノートに写して読んだりしながら，本時の学習内容についての確認が行われた。ノートに書く作業では，概ねすらすらと書き写していた。また，早く書けた児童がグループ内の児童の手助けをする姿が見られ，グループによる協働学習が根づいている様子がうかがえた。

2.3 The Hong Kong Institute of Education Jockey Club Primary School

香港教育学院（日本の教育大学に相当）附属の初等学校で，教育学院のキャンパス内に立地し，授業研究などで教育学院の教員との交流がある。１学級およそ 27 人で，児童数約 500 人に対し，34 人の教師がおり，そのうち９人が英語教師である。またそのほかに NET が１人，アシスタントが４人在籍している。この初等学校は，教科担任制を採用しているため，英語教師は英語教育に集中できる環境にあり，週 16 単位時間の授業を担当し，NET と２週間に１度，共同で授業計画を見直し，児童に対する最善な指導について話し合っている。

また，第１～３学年までは，PLP-R/W (Primary Literacy Program - Reading and Writing) という読み書きを重視したプログラム[9]が展開されており，８単位時間数の授業のうち４単位時間は，３人の教師（NET，中国人英語教師，アシスタント）で授業が行われる。児童を習熟度別に３つのグループに分け，児童の実態に合った適切な指導をすることをめざしている。

2.3.1 第３学年の授業

前述の PLP-R/W というリーディングを主とした授業が行われていた。24 人の児童に，NET，中国人英語教師，アシスタントが配置され，*New shoes* というトピッ

クで形容詞について学習していた。NET が Big book を用いて読み聞かせや内容の確認をした後，４～５人のグループに分かれ，形容詞を使って新しい靴の様子を表す表現を見つけたり，練習したりしていた。３人の教師は，５つのグループをそれぞれに見て回り，個別指導をしていた。作業が早く終わった児童は，自分たちのレベルに合った本の中から好きな読み物教材を選んで読んだ。

教材は，香港教育局のカリキュラム開発部の NET 部門によって初等学校のリーディング教材として開発されたもので，１から 31 までのレベルがあり，レベルごとにトピックが決められている。*Wake up* や *The bus is coming* など児童の身近な話題が多く取り入れられており，カラフルで興味深い絵が添えられ，親しみをもって読むことができるように配慮されている。また，各本に簡単な指導計画や評価に活用できるプリントが添えられており，指導者が指導のポイントを押さえながら容易に使えるものとなっている。一つのトピックについてさらに，長さや語彙の違う３種類の本が用意されており，児童は習熟度に合わせて読む本を選ぶことができるようになっている。NET が児童への読み聞かせや提示する教材として用いる大判の Big book と児童が個人で読むＡ５版ほどの大きさの Small book が用意されている。英語授業用の教室の壁一面に棚があり，Small book がトピックやレベルごとに整然と並べられ，使用しやすい環境が整えられていた。

３．香港の初等教育の英語授業からの示唆

香港では英語は第２言語として，初等学校１年生から必修教科として教えられている。授業時間も６日あたり８～10 単位時間と豊富である。日本の小学校における外国語活動の授業とは事情は異なるが，外国語を扱う授業として，活動，教材，形態の３点について示唆を得た。

香港では，教室外での児童の使用言語は広東語が圧倒的であるが，教室内では，英語を使う環境を教師が創っていた。しかし，参観した初等学校の授業における活動は徹底したパターンプラクティスのみであったため，よくできる児童は何度も大きな声で発音していたが，言えない児童は，何度順番が回ってきても同じところで

詰まり，流暢な表現に繋がらなかった。低学年であっても，表現を繰り返すだけでは，学習の目標が明確でなく，意欲低下につながり，活発に活動しているように見えても，その場限りの活動となる恐れがある。*English Language Curriculum Guide, Primary 1-6* (2004) が提案しているように，課題解決的な活動を取り入れていくことで，児童の興味・関心を喚起し，じっくりと考えたり，自分が伝えたい内容を言えたことが達成感につながったりするように工夫をする必要があると見受けられた。日本においては第５・６学年で年間 35 単位時間という限られた時間であるので，単純な練習に終始することがないように活動を吟味することがより一層求められる。

また，教材に関しては，前項で見たように，児童のレベルに合わせた教材開発が，校内の教材開発を専門とする教員や教育局のチームで行われていることは示唆的である。香港特別行政区教育省のホームページには，カリキュラム，教材，報告書などが数多くアップロードされており，手厚い支援が行われている。日本では，『英語ノート』や『指導資料』などは，そのままでは使用しにくい場合がある。各学校が個々の教員の実践に頼るのではなく，学校の教員がチームとなって自校の児童の実態に合わせた教材開発を組織的に行う必要がある。

さらに，香港の初等学校の英語授業の特徴である，児童の習熟度に合わせてグループ内の役割を明確にして学び合いをさせる協働学習は，日本においても参考になると考えられる。スキルの習得を第一の目的とせず，コミュニケーションへの積極的な態度の育成を重視する日本の外国語活動では，教え合い，学び合って活動することは不可欠である。児童の態度的資質を伸長することができる活動と教材を開発し，年間 35 時間という少ない時間で効果的に実践していくことが，今，日本の小学校外国語活動に求められている。

注

[1] 香港特別行政区府教育局の主席助理秘書長張国華博士をはじめ他4名の専門家からは香港の学校制度等について貴重な情報をいただいた。また，学校訪問にあたり，各学校への紹介の労をいただいた香港教育学院の梁長城教授および快く授業を公開いただいた訪問学校の教職員の皆様に感謝申し上げたい。尚，本研究には，平成23年度星城大学経営学部特別研究奨励費を一部充当した。

[2] 外務省ホームページ（http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/hongkong/data.html）。

[3] 普通話 (Putonghua) は，「北京語音を標準音とし，北方語を基礎方言とし，典型的な現代（近代）白話文による著作を語彙規範とする」（高野, 2003, p. 49）言語を指す。

[4] 香港特別行政区政府教育局の威張彗敏課程発展主任によると，英語教育の文書には英語は第２言語であると記され，自由に使いこなせる高いレベルの達成が求められている。

[5] 前期中等教育（3年間）の義務化は，1979年に実施されたが，その際に英語媒介教育偏重のまま移行したため，英語以外の教科に関する生徒の学力低下が深刻化し，中国語を教授言語とする教育を推進する動きを加速する結果となった（大橋, 1987）。

[6] 香港教育省ホームページ（http://www.edb.gov.hk/index.aspx?nodeID=2402&langno=1 より抜粋。

[7] 例えば，Me, My Family and Friends という学習テーマは，Me and My Family, My Favourite Things, Making Friends の３つの単元から構成されており，それぞれの単元に複数のタスクを設定している。具体的には，My Favourite Things の単元には，さらに My Toy Riddle, My Favourite Toy, The Broken Toy, The Toy Stall の４つのタスクがあり，これらのタスクを経て，最終的に My Toy World というプロジェクトに到達する。日本においては，東野・髙島（2007; 2011）が「プロジェクト型外国語活動」を提唱し，１つのプロジェクトの中に複数の小さなタスクを設定した課題解決的な活動を行っている。「プロジェクトはタスクの集合体」と考え，複数の小さなタスクを積み上げ，最終的な課題を解決する活動をプロジェクトと呼び，兵庫県西宮市，東京都足立区，千葉県匝瑳市・旭市，福井県福井市などの小学校で実践されている。

[8] 香港の北部では，より質の高い教育を求めて，中国本土から香港の学校に子どもを通わせるケースが増加している。また，近年では中国本土だけではなく，パキスタンやインドネシアからの児童も増えると同時に，香港における少子化が加速していることもあり，学級の中で中国語（広東語）を母語としない子どもの割合が増加し，教育における新たな課題となっている。

[9] このプログラムは，香港のすべての初等学校で行われており，NET を通して児童が豊富に英語に触れる環境を創ることを主眼とした，NET Scheme における重点施策とされている。

参考文献

大橋克洋．(1987).「香港の言語状況と英語教育」『大阪外国語大学学報』第 74 巻，1-2 号，pp. 20-34.

高野和子．(2003).「グローバリゼーションと教育 ―香港におけるネイティブ英語教師計画から考える―」『明治大学教職課程年報』25 巻，pp. 39-49.

東野裕子・髙島英幸.(2007).『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店.

------(2011). 『プロジェクト型外国語活動の展開 ―児童が主体となる課題解決型授業と評価― 』高陵社書店.

香港特別行政区教育省．http://www.edb.gov.hk

香港考試及評核局．http://www.hkeaa.edu.hk/en/hkcee/

The Curriculum Department Council (2004). *English Language Curriculum Guide, Primary 1-6,* http://www.edb.gov.hk

The Curriculum Department Council and the Hong Kong Examination and Assessment Authority (2007). *English Language Curriculum and Assessment Guide, Secondary 4-6,* http://www.edb.gov.hk

Yu, W. M., Kennedy, K. J., Fok, P. K., & Chan, K. S. (2006, May). *Assessment reform in basic education in Hong Kong: The emergence of assessment for learning*. Paper presented at the 32nd Annual Conference of the International Association for Education Assessment, Singapore.